

令和5年度 宇和中学校 第2学期学校評価 自己評価書

西予市立宇和中学校



1 学校評価の考察

(1) 第1学期（前期）学校評価との比較から

今年度の1学期末の結果と、前年度同時期の結果を比較した。

今回の回答数は、教職員は県費負担教職員数 35 名プラスその他の職員を合わせた「37 名」、生徒は 464 名中「424 名」、保護者は 421 世帯中「316 名」であった。回答の集約状況は、保護者の回答数がやや少なかった。「令和5年度第1学期学校評価アンケート」の教職員、生徒、保護者のそれぞれの回答数の合計が上記の数「37 名」「424 名」「316 名」に満たない項目は、回答における選択肢の中の「0：分からない」を選んだ者の数を除いているためである。

今回の学校評価アンケートにおいては、「ふるさと学習」及び「校則の見直し」に関する2つの質問項目を、前期学校評価アンケートに追加して調査を行った。教職員のみ14の質問項目を設けた。結果については、教職員と生徒においては、前回の調査と比べ、全体的に肯定的な回答が増加する結果となった。反面、保護者については、前回と比べ、肯定的に回答した割合が減少する結果となった。生徒については良好な回答状況であることを考えると、学校で行う教育活動について、取組の内容と成果について、様々な機会を捉え、発信していくことが必要であると感じた。教職員の評価において、質問項目14の「業務改善」に関する質問において、評価が低くなっている。校務を整理し、教職員一人一人が職場環境づくりに取り組んでいく必要があると考える。

(2) 項目別；考察「令和5年度分」

① 項目1（校訓のような生徒の育成）

教職員及び生徒の評価が高い。保護者もほぼ9割が肯定的な回答となっており、校訓を意識した教育活動に取り組んでいる。今後も、様々な教育活動の中で、「心身を鍛え、自ら学び、つながりに生きる」場面を設定したり、ホームページや各種通信で、その取組や成果を紹介したりすることで、より高い成果を得ることにつながっていききたい。

② 項目2（学校に行くのが楽しみ）

生徒の肯定的な回答が9割を超えている。前期学校評価と比較しても、生徒の得点が0.15ポイント上昇している。生徒にとって、楽しさや充実感がある教育活動が実施できていると考えられる。しかし、不登校生徒が多数存在するのも事実である。その要因は、多種多様であるが、どの生徒にとっても「学校に行きたい」と思えるような教育活動を目指し、工夫ある取組を継続していききたいと考える。

③ 項目3（自主的な学習）

教員と生徒の解答において、前期学校評価の結果よりも得点が上昇している。教員による授業改善の成果が現れたり、冬季休業中の課題を見直すことにより、生徒が自主的に学習方法を工夫したりした成果が表れていると考える。反面、保護者の

評価は、前期学校評価と比較して0.24ポイント低下しており、全ての質問項目の中で最も大きな下げ幅であった。学校で行っている学習活動が、家庭学習における生徒の自主的な学習に結び付くよう、家庭との連携をより一層図りながら取り組んでいく必要があると考える。

④ 項目4（分かりやすい授業）

生徒の肯定的な回答の割合が98%となっている。教職員の肯定的な回答の割合も94%となっており、教員による授業改善の成果が表れていると考えられる。ただ、項目3と同様、保護者の評価において、肯定的な回答の割合が74%と、若干低い水準となっている。今後更に、ICT機器を効果的に活用したり、話し合い活動を充実させたりし、生徒が「分かる」と実感できる授業の実施を継続していきたいと考える。

⑤ 項目5（充実した部活動）

生徒の肯定的な回答の割合が95%となっており、良好な結果となっている。昨年度後期の結果が87%であり、それと比較しても高い水準となっている。部活動顧問や外部指導者が、それぞれの部活動に所属する生徒、保護者と良好な人間関係を構築し、部活動経営に取り組んでいると考える。今後も、部活動に対する不適応を生じる生徒等が出現しないよう、指導方法や生徒への言葉掛けを工夫しながら、適切な部活動経営に努めていきたいと考える。

⑥ 項目6（話を聞いてくれる）

全校生徒466名（南予で最も多い生徒数）の規模で、97%の生徒が肯定的な回答（教職員も97%が肯定的な回答）をしており、教職員と生徒の間に、良好な人間関係が構築されていると考えられる。教職員は多忙な中でも、学級、授業、部活動等において生徒の声にしっかりと耳を傾けていると考えられる。また、不登校傾向の生徒等とも、継続的に関係を保つことができている。今後も「話を聞いてくれる」と感じる生徒が100%になるよう、カウンセリングマインドを大切にしながら取り組んでいきたいと考える。

⑦ 項目7（命の大切さ）

肯定的な回答をした割合は、生徒が98%、保護者が86%、教職員が97%であった。生徒が自分自身や他者の命がかけがえのないものであることを実感できるよう、学校、家庭、地域及び関係機関と連携しながら、「いのち」に関わる取組を行った成果であると考えられる。今後も道徳教育や人権・同和教育、SOS教育、性に関する教育等、様々な教育活動において、命を大切にする教育を推進していきたい。

⑧ 項目8（いじめ・トラブルへの対応）

前期学校評価では、否定的な回答をした生徒が32名だったのに対し、今回は17名と、約半数にまで減少した。夏休み以降、様々な事案に対し、学校として対応してきたが、対象生徒、あるいは、その周囲の生徒にとって、学校からの指導内容等について理解が得られていると考える。反面、保護者の回答については、前期学校評価の際よりも、否定的な回答が増加している。長期化、もしくは複雑化している事例等はないが、トラブル等への対応について、職員会や校内研修等で教職員の意識統一を図るとともに、迅速かつ適切な対応により一層努めていきたい。

⑨ 項目 9 (分かりやすい情報発信)

生徒、保護者、教職員の回答ともに、良好な結果となっている。一人一台端末が導入されてから、今年度で3年目になる。Google クラスルームやGoogle フォームを用いた連絡等のやり取りが機能的に運用されていると考えられる。今後も引き続き、ホームページ、連絡アプリ(すぐる)、学級・学年通信、生徒指導通信、電話等を用いて、スピード感を持った情報提供に努めたい。

⑩ 項目 10 (いけないことをきちんと指導している)

生徒の肯定的な回答の割合がほぼ100%であった。教職員が92%、保護者が82%となり、高い評価であった。生徒指導等に関して、教職員が共通の認識のもと、毅然とした態度で指導に取り組んでいると考えられる。今後も教職員の指導が、生徒自身の規範意識の向上につながるとともに、生徒が主体的にきまりの意義を考えたり、お互いに声を掛け合いながらルールを守ろうとしたりする態度が身に付いていくよう、工夫ある取組を行っていききたい。

⑪ 項目 11 (挨拶)

生徒会を中心に、「あいさつ日本一」を目指し、工夫した取組を行ってきた。しかし、前期学校評価の結果との比較で、生徒が0.07ポイント低下、保護者が0.22ポイント低下という結果となった。教職員においては0.08ポイント上昇という結果となっている。校内でのあいさつについては、全体的に良好な状態であるが、郊外でのあいさつに若干課題があることや、あいさつの実施について個人差があることが要因となっていると予想する。あいさつの輪が、生徒全体、地域にまで広がっていくよう、工夫ある取組を展開していききたい。

⑫ 項目 12 (清掃態度)

項目11と同様、前期学校評価の結果と比較し、生徒において0.07ポイントの低下となった。微減ではあるが、清掃態度等について、生徒が課題を感じている実態である。これまで同様、まずは教職員が担当場所に素早く移動し、生徒の清掃態度を見守り、良かった点や反省点を確認するという地道な取組を継続していききたい。素晴らしい清掃態度は、宇和中学校の伝統である。教師主導の取組から、将来的には、生徒自身が主体的に清掃活動に取り組めるような学校づくりに努めていききたい。

⑬ 項目 13 (人権教育)

生徒、教職員ともに肯定的な回答の割合が高かった。反面、前期学校評価の結果同様、保護者の「人権に関する話を家庭ですることが増えた」という問いに対する回答については、若干低い評価(前期と比較して0.11ポイントの低下)となっている。人権・同和教育を中心とした学習の展開はもちろんのこと、学校・学年だより等を活用した、身近な人権問題や教育上の諸問題についての情報提供をはじめ、人権をテーマとした講演会の開催等、次年度の取組も含めて、計画的に家庭への啓発活動の工夫を図っていききたい。

⑭ 項目 14 (業務改善)

前期学校評価の結果と比較し、0.14ポイント上昇した。しかし、今年度第2学期の、超過勤務平均時間は72.5時間となっており、依然として長時間労働の実態

が見受けられる。まずは、夜間遅い時間に及ぶ長時間労働を改善していきたいところである。まずは、業務内容や学校行事等、必要なものと不要なものを整理はもろん、各学年部等で連携し、業務の平常化を図りながら、教職員の働き方改革に取り組んでいきたいと考える。

⑮ 項目 15（ふるさと学習）

生徒、教職員、保護者ともに肯定的な回答の割合が高かった。今年度から新しく取り組んでいる活動である。生徒が主体的に取り組み、教育効果の高い活動となるよう、学校と地域が連携し、様々な方法を模索しながら取り組んでいきたいと考える。

⑯ 項目 16（校則の見直し）

項目 15 同様、生徒、教職員、保護者ともに肯定的な回答の割合が高かった。生徒による自治的な活動は、多様な能力の育成と人間的成長の達成につながると考える。今後も、校則をはじめ学校生活全般に関することについて、生徒自らが主体的に考え、協議し、目標を定め、苦勞を乗り越えてそれを実現していくことに取り組ませ、受け身の教育だけでは実現できない、大きな成長を得られるよう、取組を工夫していきたい。

2 具体的な今後の取組…「令和 5 年度 2 学期（後期）学校評価を受けて」

(1) 学校全体での取組（改善点の明確化、意識改革の必要性）

- ・ 生徒自身が、今日が楽しく、明日が待ち遠しいと感じることができる学校づくり
学校行事やふるさと学習等、工夫ある教育活動を通して、生徒がやりがいと充実感を得られるような学校づくりを目指す。また、きめ細やかな教育相談等の充実と、生徒同士がお互いの存在を大切にし、支え合うことのできる集団作りを行い、生徒の所属感及び、自己肯定感の向上に努める。
- ・ 主体的な学習を促すための実践の工夫
I C T 機器等の活用により、分かりやすい授業の展開に努める。また、全国学力・学習状況調査や愛媛県学力診断調査、西予市学力調査等の結果を分析し、生徒自らが、主体的に学習に取り組めるよう、授業改善に取り組んでいく。併せて、宿題の質や量を見直す機会を設け、生徒の学力向上と主体的な学習態度の育成につながる取組の在り方について検討する。
- ・ 家庭において、人権課題について話す機会を増やしていく工夫をする。
- ・ 「あいさつ」および「清掃態度」の向上
挨拶と清掃態度の向上に向けて、教職員・生徒が毎日、自分の取組を見つめる。

(2) 学年部を中心とした「学校評価の考察と今後の取組」

< 3 年部考察 >

項目 2 「学校に行くのが楽しみ」…中学校卒業後の進路を見据え、希望を持って学校生活を送ることができるような雰囲気づくりが必要である。少しでも不安な気持ちを取り除き、学習に向かわせ、次の目標を持って卒業できるようにしたい。

項目 4 「分かりやすい授業」…教師 94%、生徒 98%と高評価となっているが、保護者の意見は 74%と大きな差がある。学校の取組を保護者に知ってもらう機会を設ける必要がある。

項目 6 「話を聞いてくれる」…97%の生徒が肯定的な回答をしており、生徒と教員

間で良好な人間関係が築けていると考えられる。先生方は授業時数が多い中で、生徒との関わりを大切にしていた結果だと考えられる。

《前期戦略》…1学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 活動の工夫と仲間づくり(人間関係づくり)のサポートを行う。
 - 学習委員会集会のような勉強の仕方について学ぶ場を設けたり、テスト期間に行ったリモートで質問を受け付けたりする活動を継続して行っていく。
 - 教育相談の時間はRAMPSの時間に充てられたので、2学期はいろいろな先生に相談をする機会を作れたらと思う。また、完全下校の時間の必要性は感じているが、ある程度フレキシブルに生徒が動ける雰囲気を作る必要性も感じる。放課後以外の時間の使い方を工夫することも視野に入れ、検討していく必要がある。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 生徒対応の共通理解を図る。学年部会(連絡)を更に密にするとともに、学年集会を活用し、認めたり、指導したりする。学級担任が対応しきれない生徒は、スクールカウンセラーに繋いでいく。
 - 継続ノート of 取組内容や提出方法の見直しをする。
 - 相談しやすい先生が担任の先生とは限らないので、学年部がチームとして動き、生徒がどの先生に相談しても構わないという安心感を得られるような、教員同士のチームワーク作りに取り組んでいく。

《後期戦略》…2学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 今年度参観日は年度初めの学活と人権参観日だけであった。フリー参観日等の機会を設け、学校での授業の様子を保護者に見ていただく機会を設ける。
 - 各学期末に全校体制での教育相談を実施する。1学期初めの教育相談は学級担任で行うが、各学期末の教育相談は生徒の希望を聞き、生徒が話をしたい人と教育相談をする。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 教員の時間的なゆとり、心の余裕が大切であると考え。特に学級担任の負担が少しでも減るような学年部での協力体制を工夫していきたい。
 - 他の教科でどのような内容を学習しているか、生徒に合った授業方法など、情報共有する。
 - 休み時間や教育活動(授業や部活動)の中で、積極的に生徒と関わる。

<2年部考察>

項目2「学校に行くのが楽しみ」…昨年はあまり登校できなかった生徒が、「学校が楽しい。昨年登校しなかったことを後悔している。」という文章を書いていた。部活動や交流学級などで様々な関わりや支援をしていただいている先生方や生徒のみなさんのおかげだと感じる。

項目3「自主的な学習」…回答結果の数値としては低くないが、学習意欲が低い生徒がおり、宿題も減らしているため、自主的な学習ができない生徒も多いと感じる。

項目11「あいさつ」…4月当初、元気な挨拶の声に驚いたが、2学期は1学期に比べると挨拶の声の元気が減ったように感じた。しかし、3学期になって、

面接練習をした3年生の声が元気に響くようになり、他学年へ良い影響を与えてくれるのではないかと感じている。

《前期戦略》…1学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 「つながり」の部分では、1学期に結成した縦割のグループ編成をうまく活用していく。ふるさと学習、運動会、秋輝祭、清掃班など。
 - 継続ノートはやらされている感が強い。量や提出日を減らしていくと同時に、授業の中で生徒の理解度を上げていくことを目指す。
 - 生徒が保護者に学校での様子を話さないことが保護者の数値が低いことにつながっているかもしれない。生徒指導通信等を活用し、生徒指導に関する学校の方針や指導内容が保護者に伝わるよう工夫する。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 2学期の運動会や合唱コンクールでは各クラスが競い合うが、最終的には、各クラス互いの健闘を称える場を設定し、互いに高めあう気持ちの醸成を図る。
 - 進路指導を進める上で将来の目標を早めに設定させることで、学習に対する自主性を高めていく。
 - 生徒指導をしたときには、学年部の教員で連携して取り組み、保護者への連絡をしたり、家庭の協力を依頼したりする。また、身だしなみ等について、生徒自らが考え調整していけるような雰囲気づくりに取り組む。

《後期戦略》…2学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 不登校生徒への個別のアプローチを充実させ、少しでも「学校に行きたい」と思える生徒を増やしていく。
 - 課題の出し方を、冬季休業中のように見直したり、各教科の「学習の手引き」を作成するなどして、自主的な学習の進め方を例示することによって、自分に合った学習方法を見出させたりする。
 - 大きな声だけが「日本一のあいさつ」ではないと考える。様々な場面、それぞれの生徒の特性に応じて、「いいあいさつ」を考えさせ、認め合う活動を取り入れる。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - ちょっとしたことでも褒める。学校行事が自己肯定感を上げるチャンスだと考える。機を捉えて、学年部の職員が意識を統一して取り組んでいく。
 - 点の取れる小テストを定期的実施し、学習意欲を高める。
 - 次年度、最高学年になるという自覚を持たせ、生徒への声掛けを、粘り強く行っていく。
 - 生徒との会話やふれあいを更に増やし、生徒と教員が自然にコミュニケーションをとれる雰囲気づくりに努める。

<1年部考察>

項目1「校訓のような生徒」…ふるさと学習を実施することで、地域の協力者と関わりながら学習が行えている。普段は、登下校の見守りなど、生徒自身はその恩恵に気付く場面が少なかったと思うが、ふるさと学習では定期的に対面して関わりを持っていて、ため、「ふるさと」や「地域の方々」「生徒どうし」との

つながりを実感して学んでいると感じる。

項目 11「あいさつ」…前期学校評価の結果との比較で、生徒の回答結果が 0.07 ポイント下がっている。確かに、1 学期最初の宇和中生のあいさつは活発に行われていたと思うが、2 学期後半からは中だるみか、あいさつに元気がないように思う。また、自身の部活動顧問にはしっかりあいさつをするなど、対象によって、あいさつの元気の良さが変わる風潮がある。あいさつが第一印象を決めること、コミュニケーションの第一歩であることを理解させる必要がある。

《前期戦略》…1 学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 教育相談の数を多くする。部活動においても、生徒の様子をよく観察し、声掛けをしたり、生徒の意見に耳を傾けたりする。
 - 学校行事等見直し、必要に応じて簡略化を図る。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 教育相談の際には、悩みがある生徒は学担が話を聞き、他の生徒は学年部の先生にも協力してもらい生徒全員が教師と話ができる体制づくりに努める。
 - 学級担任は空き時間が少ない中で、毎日あゆみと継続ノートを見なければならず、負担も大きい。継続ノートのチェックなどは学年部の副担の先生方にも手伝ってもらおう等、業務の割り振りについて学年部内で工夫していく。

《後期戦略》…2 学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 廊下ですれ違う際、あいさつをしない生徒に対して、こちらが見本となるあいさつを行い学ばせる等、あいさつを促すことを徹底する。また、授業においては、教員が最も大きい声のあいさつで入室する等、生徒の模範となるよう努める。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 2 学期は、学年集会を多く実施した。学年部の教員が協力して自分の専門的な知識等を、学年全体に伝えることで、学級間に偏りがなく生徒に指導できた。また、学年全員で集まり学習することを通して、学年全体のまとまりが見られたり、他学級の生徒の活躍を目にすることで刺激を受けたりと生徒にもメリットがあった。今後も可能な範囲で、学年のつながりを深められる学習の場面を取り入れていく。
 - 朝の登校時に、玄関で生徒一人一人に向き合い、あいさつ活動を行う。学年部で協力して、継続的な取組を行う。

<本年度からの取組に関する考察>

項目 15「ふるさと学習」

- 地域とつながり、生徒が地域の中で生かされていることを実感することができるとてもいい取組だと感じる。
- 生徒が生き生きと活動する姿を見ると、「学校に来るのが楽しい」と思える一面だと感じる。
- よい活動だが、いろいろなところにしわ寄せがきているとも感じる。授業時数、進路関係の時間確保の難しさ、1 グループに教員 1 人体制のため、出張や年休を取った場合の対応の大変さなどなど。この取組のよさを生かしながら、様々なしわ寄せや負担が少しで済むような体制の見直しが必要だと思う。
- 運動会、秋輝祭レベルの大きなイベントが今年追加された形となった。教員数減の状況でかなり準備や計画に向けて、膨大な時間を費やし、教員の負担が大きかつ

た。「0からはじめる」からこそ、事前に職員会や企画会で見通しを立て、実行できそうか、無理がないか、いろいろな先生方の意見をしっかり聞き、考えてから行っていく必要もある。

- 3年部の先生がイベント担当となっており、入試業務と重なり負担をかけている。

項目 16「校則の見直し」

- 生徒の考えを取り入れた見直しは、大変よいと思う。押しつけの指導ではなく、生徒の主体的な取組につながると感じる。
- 生徒たちが自ら主体的に動いて変えたという実感が持てたのではないかと感じる。
- 地域の方々、受験する高校など、周りの理解が及ぶかどうかという心配はある。受験の時の3年生の姿に注目したい。
- 受験前の生徒としては、個によってゆるんでしまうところがあるので、生徒による身だしなみの確認等、学年部で時間を取っていかねばならないと考える。